

No.54

2002年10月発行

新潟県支部報

マイ スコープ

珍 鳥 飛 来

上越市 古 川 弘



ズグロカモメ夏羽の飛翔。1996.3.12に浮島に2〜3羽飛来した中の1羽を写したものです。



夏羽のクロハラアジサシ。1998.5.17に頸城村島田の水田用水に飛来し、のんびり休んでいる様子を写したものです。



エリマキシギの夏羽で、後にも先にもエリマキの夏羽はこれがたった一回の観察です。1996.5.27〜30頸城村市村新田のタンボに現われた時のものです。



夏羽のマミジロツメナガセキレイ(ツメナガセキレイ)記録が一寸古く、1987.5.15大潟町の天ヶ池のそばの水田に飛来したものです。

市街地の軒裏でチョウゲンボウが繁殖

上越市 花岡佳代・山本 明

上越市直江津地区新光町の本造建造物の軒裏で、数年前からチョウゲンボウが繁殖している。付近には会社倉庫、事務所、マンションなどが建っていて、営巣した倉庫の脇にはマンションの広い駐車場がある。

巣のある軒の高さは15.6m、ちょうどスレートの板が1枚だけ張られていて(図2)、その板の上に産卵し、抱卵したのであろう。ヒナが大きくなると、板の縁に出て顔をのぞかせていた(図3)。親は近くにある高い鉄塔や屋根によくとまって、鳴いていることがあり、雄の捕ってきた餌を雌に渡すのが観察された。

営巣している倉庫の社員の話では、この軒裏にチョウゲンボウが巣を造り始めたのはマンションが建った4年前からで、それまでは別の所で営巣していたらしい。マンションが建つ前は、この付近は田んぼだったので、チョウゲンボウの餌場になっていたようだ。

昨年は7月10日前後に4羽のヒナが巣立った。時期からして2回目繁殖のヒナと思われる。1回目の繁殖についてはよく観察しなかったが、5月18日巣で2羽のヒナを確認した。それ以上いたかどうかは分からない。

今年は少しよく観察したところ、1回目の繁殖では、5月20～25日までに6羽のヒナが巣立ち、2回目の繁殖では8月6～7日に2羽のヒナが巣立った。2回目の2羽のうち1羽は8月10日に、哀れにも車に轢かれて死んでいるのを見つけた。

今年の1回目の繁殖では3月下旬頃抱卵に入り、4月下旬から雌が巣を離れる時間が増えたので、この頃孵化したものと思われる。2回目繁殖では6月中旬に抱卵に入り、7月中旬頃に孵化したようである。1回目のヒナが巣立って1ヶ月も経たないうちに、2回目の抱卵に入っていることになり、巣立ったヒナを暫く雄と雌交代で(抱卵も交代なので)世話している



図1. 営巣した軒裏(白いスレート部分)

のだろうか(この点まだ観察不充分)。

なお、今年になって、巣の近くの会社に勤めている人がその落ちたヒナ数羽を家へ持ち帰り、餌付けをし保護している旨の情報を得た。そこで、上越健康福祉事務所環境センター(旧保健所)へ連絡したところ、早速市の環境課と連携し対応がなされた。その家では3羽のチョウゲンボウがいて、毎年1羽づつ(今年も)拾って保護飼育していたという。愛玩用の飼育ではないらしく、どうしてよいかわからず、飼育を続けていたようであった。赴いた県と市の担当者は当人によく説明し、3羽のチョウゲンボウは6月中旬無事愛鳥センターへ届けられた。

(まとめ 山本)



図2. 巣から姿を見せた巣立ち間近のヒナ

山 本 山 の 鷹 柱

新津市 荒川 節子

昨夜来の雨は止んで雲の切れ目から青空が覗く9月15日の朝となりました。

1行4人は迷うこともなく山本山高原入り口に到着です。山頂展望台にはすでに十数人が空を見上げています。魚沼の山並み、西山連山、冷気を感じる初秋のすがすがしい風の中にビッグスワンの銀色の屋根がはるかに霞んで見えます。ぐるりと全天が見渡せます。

初めは目障りに思えた雲も、小さな鳥影を見つけるにはとても便利なものだと気づかされました。「左から2番目の峰の右ね、濃い色の細長い雲の一番上にほらほら」という具合です。これがもし雲ひとつ無い青空だったらきっと姿を見つけることに苦労したことでしょう。

なにやら背中の方から「あっ、サシバかと思ったらトンボだ。もう本当に紛らわしいな」という声がする。えっ！どうしてトンボを鳥と間違えるの？

「右から2番目の頂に1羽、は鳶かな」「アンテナ塔の左の丸い雲の右横からも2羽ね」気温が徐々に上がってきます。

「あー上がった。流れるねー。鷹柱だ。」また次のサシバ達がやって来ます。

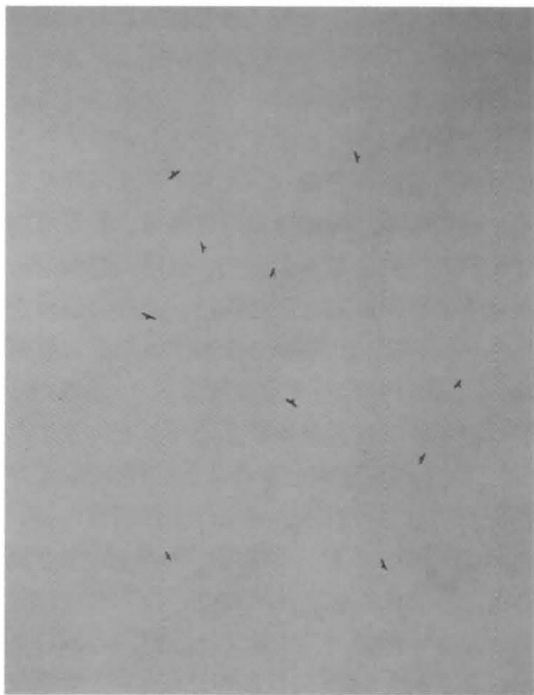
「あれはハチクマだ。やっぱり大きいね。」「今年もハチクマの羽が傷んでいるねー。」

後ろ、左、右から次々に挙がる声に必死に双眼鏡を合わせていきます。なるほどねー。頭の上を横切る鳥に見とれていると、先達が羽の模様、尾羽のかたち、首や肩の様子を実にわかり易く言葉短く教えてくれます。今度は自分が先にと「あついたいた。あの雲のしたの…」といいかけるとトンボだと判り首をすくめて笑ってしまいました。双眼鏡の中ではトンボが鷹に姿を変えてしまう不思議が現われるのですね。

今、私たちがここにいる。この日を選んで、

次々にやってきては去っていきゆく不思議なご縁の鷹たち。真上を通過する姿を目で追ってゆくといつの間にか、かき消すように小さく遠くなってゆきます。なんともいえない壮大さに心を打たれます。どこをどのように飛んで目的地にたどり着くのでしょうか。1時間半で90羽の鷹を見送り、バードウォッチングは終わりました。

私たち4人は次の楽しみに向かいます。標識を頼りに、予定に無い道を走るのです。初めての道をガチャと曲がり、思わぬ楽しみにポンと出くわすガチャポンロードです。先ずは美味しい小千谷そばで腹ごしらえ。この日は小国に入り、誰もいない紙の博物館で懐かしい香にしばし浸ったのでした。私達のバードウォッチングはこうして二重三重の楽しみがあります。これが、何回ウオッチング重ねても初心者域から抜けられない訳のひとつなのです。



市街地の建物で連続繁殖したイソヒヨドリ

新潟市 千葉 晃

はじめに

イソヒヨドリは留鳥として全国各地の海岸や島嶼にごく普通に見られ、雄の鮮やかな青い羽色と美しい囀りには野鳥愛好家ならずとも魅了される。その漢字名には「磯鶇」を当てるが、分類上はヒヨドリ（鶇）の仲間ではなくツグミ（鶇）類の一員である。確かに体形や習性はヒヨドリ類よりはツグミ類に似ている。本種とその近縁種（いわゆるRock Thrushes）は元来岩場や崖を好み内陸にも広く分布しているが、海岸中心に生息するのは我が国の特徴らしい。また、本種の学名 *Monticola solitarius* は「単独性で、山に住む」の意味だという。このように聞くと、以前松本市内のデパート屋上で囀っていた1羽の本種雄をみていぶかしく思ったことも今はうなずける。つまり、コンクリート製の建造物を天然の岩場に見立てての生息と合点できる。末尾に挙げた文献には、本種が天然の岩場の他、建造物の隙間や人家の軒下などに営巣する例があると記されてある。そのような例を私も新潟市の一隅で見ることができた。1999年に初めて繁殖を確認して以来、4年連続して同じ場所で雛を育てたイソヒヨドリを紹介したい。

繁殖地と周囲の環境

本種の繁殖が確認された場所は、新潟市浜浦町地内にある私の勤務先「日本歯科大学新潟歯学部キャンパス」である。校舎は海岸から内陸へ約300m、関屋分水新潟大堰から東北東へ約700m離れた文京地区に在り、北側には海岸防風林（優占植物はクロマツとニセアカシア）、そして東西と南には小・中学校および住宅が隣接している。校舎は全体暗褐色のレンガで外装され、一見堅固な城砦や岩場を思わせる。巣は本館と1号間をつなぐ渡り廊下の下にある隙間（地上約7m、隙間の幅約4cm、長さ約2.5m）に営まれ、隣接する中庭は

採餌場の一部に、一方校舎の屋上はソングポストや見張り場に利用されていた。また、巣場所の下（地上）には屋根付きの渡り廊下があり、時間帯によっては学生や教職員が少なからず行き交っていた（図1）。



図1 イソヒヨドリの営巣場所（矢印）

繁殖活動の概要と諸段階

概要：4年間の観察結果を総合すると、本種の繁殖活動は概ねつぎのような段階に区分できた：定着、配偶形成、造巣、産卵・抱卵、育雛、巣立ち・家族生活、分散。一連の繁殖活動はおおよそ3月上旬に始まり8月中旬に終了した。以下、各段階について概要を記す。

定着：本種は秋から冬の間も時折キャンパス周辺で見かけるが観察頻度は低く、この間は定着しているとは言い難い。雄の定着は例年3月上旬から始まり、この頃晴れた日などは中庭にある池の周囲のフェンスや校舎のあまり高くない屋上の一隅に留まり、地上の餌（昆虫類）を狙って飛び降りたりする様子がしばしば観察された。やがて雌も観察されるようになり、4月初旬までには雌雄の接近（間隔1～2m）が認められた。雄の囀りはもっぱら午前中に聴かれ、屋上の幾つかの場所がソングポストとして利用された。しかし、囀りは散発的でまだ本格的ではなかった。雄による同種雄の追跡は1度観察ただけで、もっぱら他種鳥類（ハシボソガラス、ハシブトガラス、

ハクセキレイ、スズメ、ムクドリ) に対するものであった。追跡はいずれも巣から約60m以内にある中庭の低空や地上で見られ、ほとんどが鳴き声を伴わず侵入個体を約数mから数十m追跡するだけの単純な行動であり、単発的であった。なお、排他行動はこの時期だけでなく繁殖期全般に渡って観察された。

配偶形成：観察期間中、配偶行動(求愛・交尾)を観察したのはただ1回である。それは2002年4月28日(快晴)の午前8時30分頃から約1分間の短い時間に認められ、概略つぎのとおりであった。ソングポストの1つ(8号館屋上のアンテナ：地上約50m)で囀っていた雄が突然ゆっくりと舞い立ち、一声の囀りと共に翼と尾を充分に広げソアリングしながら滑り落ちるように急降下し、地上約10mのテラスに瞬間的に止まり再び同じ姿勢で降下を続けた。地上1m付近で水平方向に転じ、4m程滑空し低木のそばに着地した。同時に鋭い声(ゲッまたはゲゲッ)を発し、木立に向かって頭胸部を少し下げ、両翼を半開状態に下げ、尾を持ち上げて扇状に開く姿勢を取った。雄はこの直後低木内に飛び込み地上1m付近の枝上にいた1羽の褐色の鳥と一体になり、すぐに枝から離れ飛び去った(図2)。確認のため低

木に接近したところ、褐色の鳥は本種雌個体であった。私の接近によりこの個体も飛び去った。前後の様子からみて、一連の行動は求愛および交尾と考えらる。繁殖期の雄はしばしば①囀りながら両翼を持ち上げる誇示行動や②囀りながらソアリングする誇示行動を示すが、上記した行動はこれらと明かに異なっていた。なお、ソングポストは巣からあまり遠くない(60m以内)校舎の屋上の角、テレビアンテナ、給水タワーなどが選択され、使用頻度の高い場所はテレビアンテナなど高くてよく目立つ場所であった。囀りは4月～6月頃が最も盛んで、1日のうちでは午前中と夕刻によく聴かれた。

造巢：造巢活動は4月中・下旬の朝に数回目撃しただけである。雄も造巢に参加したが、もっぱら雌が分担しているようだった。巢材運びは人影の少ない早朝に行なわれるようで、早い時間帯に出勤した時にのみこれが観察された。中庭(巣から約40mの距離)の地上で枯草等を集め、かなり警戒しながら巣穴へと運び入れ、巣から出てくるまでは数十秒から1分間近くかかった。巢が完成し抱卵期に入った時期の巣を下から覗くと、巢材の枯草が数本垂れ下がり外部から見えるような年もあったが、これはむしろ例外的であった。

産卵・抱卵：4月下旬から5月中旬の期間は雌親を観察する機会が著しく減少し、この時期が抱卵期と思われる。巣立ち日から逆算して産卵日を推定すると、年によって差はあるものの、産卵は概ね4月中と考えられる。クラッチサイズ(1腹卵数)は確認できなかったが、文献には5～6卵と報告されている。なお、雌雄の観察頻度からみて抱卵はもっぱら雌が分担しているものと判断された。

育雛：育雛には雌雄が関与したが(図3、4)、主に雌親が分担し、雄親は主にナワバリ防衛や警戒に当たっているものと思われた。ここでは1999年6月4日および8日～10日いずれも午後の観察(4日間で合計4.9時間)で得た結果を表にまとめてみた。記録できた合計32回の給餌飛来のうち、雌は22回(68.8%)、雄は

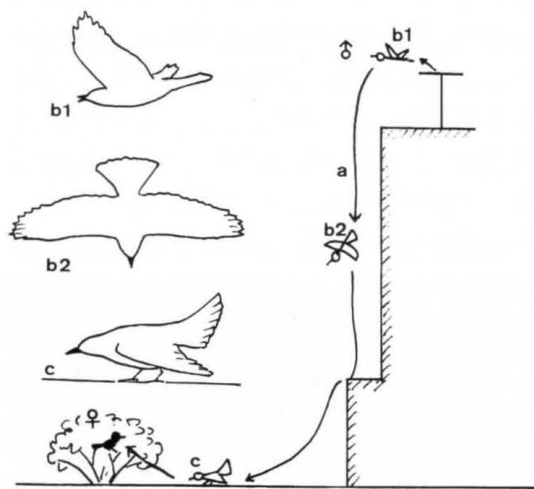


図2 イソヒヨドリの配偶行動略図
a, 雄の移動軌跡;
b1～2, 雄のソアリング誇示行動;
c, 交尾直前に見られた雄の求愛姿勢

表1. イソヒヨドリ雛への給餌に関する雌雄分担と餌生物(1999年6月4～10日)

月 日	時刻(時間)	給餌回数(回/時)	識別できた主な餌生物
6月4日	15:10～16:10 (1.0時間)	♀ 4回 (4.0)	フナムシ、蛾、昆虫の幼虫
		♂ 0回 (0.0)	
6月8日	14:25～16:00 (1.6時間)	♀ 7回 (4.4)	フナムシ、蛾、昆虫の幼虫、ミミズ、クモ
		♂ 2回 (1.3)	
6月9日	13:45～15:50 (1.1時間)	♀ 8回 (7.3)	フナムシ、甲虫、昆虫の幼虫
		♂ 5回 (4.5)	
6月10日	14:50～16:00 (1.2時間)	♀ 3回 (2.5)	フナムシ、昆虫
		♂ 3回 (2.5)	
合計	(4.9時間)	♀ 22回 (68.8%) : ♂ 10回 (31.2%)	



図3 給餌飛来したイソヒヨドリの雄親

10回 (31.2%) となり、雌は雄の約2倍の頻度で給餌に飛来したことになる(表1)。この時期の餌生物を整理してみると、判定できたものは甲殻類(フナムシ)、昆虫類(甲虫類と蛾類の成虫および幼虫、蟻類成虫)、クモ類およびミミズ類で、中でも昆虫類の幼虫とフナムシが優占していた。フナムシは関屋海岸でもごく普通にみられ数も多く、雌雄の給餌メニューの中では高頻度(雄親では50%、雌親では41%)で出現した(表1)。雌親が給餌する餌生物を見ると、フナムシより昆虫(主に幼虫類)の数が明らかに多かった。このことから採餌環境は雌雄間で若干異なるものと判断される。すなわち、雄は巣からやや遠い海岸で、また雌は海岸の他草地や林地を広く利用して餌を探しているものと考えられた。これを裏付けるように、雌親についてはキャンパス内の中庭(芝生や低木)で餌を捕る姿が頻繁に目撃された。その様子や餌の内容からみて、



図4 給餌に飛来したイソヒヨドリ雌親

餌の捕獲は待ち伏せ型で、主に地上や地上付近に生息する小動物を対象にしていることが窺えた。餌を運ぶ際は直接巣に入ることはごく希で、辺りを充分警戒し数ヵ所に立ち止まりながら巣に接近し、巣の真下の壁にへばり付くと一気に這うようにして巣穴へと進入した。付近に外敵(人やカラス)を認めた際は低いググッ・グググッまたは高いヒーッ・ヒーッと聞こえる声を発しながら警戒し、時には威嚇を伴った。雛が成長すると、辺りには餌をねだる雛の声(ジーツ、ジジジ)がよく聞こえてきた。雛の糞は親鳥(主に雌)が巣から遠方(時には100～130m)に運び捨て、電線等に一旦止まりクチバシから振るい落す様子も観察された。

巣立ち・家族生活: 巣成ちは晴天の日中行なわれ、最も早い年で5月24日(2002年)、遅い年で6月13日(1999年)に見られた。巣立ち雛数は1羽～3羽(1999年1羽、2000年3羽、2001

年2羽、2002年2羽)の範囲であった。巣立ち当日は親鳥が餌を持って巣の付近に飛来し、巣に入らずに前述した警戒声を盛んに発し巣立ちを促した。雛は巣穴の入り口付近で餌ねだり声を発し、躊躇しながらこれに応じ、一気に飛び出し数mないし10数m離れた下の渡り廊下屋根や屋上に達した。しかし、巣だった後も地上に落下することが多く、毎年のように雛を捕まえては屋根に戻してやる作業を続けている。2001年には2羽の巣立ち雛に標識を付け、体各部を計測した後放鳥した(図5)。この際、2羽の背面(特に風切羽外弁)の色彩が若干異なり1羽は青みが強い事に気づいた。この個体は雄と思われる。巣立ち雛は親大になるまでもっぱら屋上で生活し、地上から姿をみることはできなかった。しかし、7月下旬から8月上旬には親大に成長した幼鳥が早朝や夕刻に姿をみせるようになった。周囲にはカラスやトビなど外敵が多いため、かなり用心して暮らしているものとみられる。

分散:8月中旬から下旬にかけて独立したとみられる幼鳥を中庭でしばしば認めたが、親の姿は殆ど観察できなくなった。親は幼鳥を伴って隣接地やさらに遠方に移動する場合もあると考えられるが、分散の詳細はよくわからなかった。

あとがき:4年間も連続して同じ場所に営巣したイソヒヨドリの例(同じ個体かどうかは不明)はこれまで知られていないように思われる。長期間利用の理由は不明なものの、今回の例は巣穴として利用できる空間が広いためとも考えられる。なお、今回述べた配偶行動



図5 標識されたイソヒヨドリの巣立ち雛

も国内ではまだ報告されていないものと思われる。この行動が本種に一般的か否かは今後の観察に待つところが大きい。皆様からの情報やご教示を期待している。

文献

- 日本鳥学会編(2000)日本鳥類目録改訂第6版、土倉事務所(京都)
上越鳥の会編(1994)雪国上越の鳥、郷土出版社(松本)
環境庁編(1981)日本産鳥類の繁殖分布、大蔵省印刷局(東京)
清棲幸保(1965)日本鳥類大図鑑、講談社(東京)
高野伸二(1981)日本産鳥類図鑑、東海大学出版会(東京)

養魚場におけるカスミ網によるカワセミ大量死の処置について(経過報告)

日本野鳥の会 新潟県支部

1. 発見と通報

平成13年8月16日午前、日本野鳥の会新潟県支部会員赤塚政博氏がフィールドとしている溜池群を回って探鳥していた折、加茂市黒水地区のニシキゴイ養魚池で、網にかかって死んでいる多くのカワセミを発見した。直ぐ携帯電話で新潟県愛鳥センターへ通報し、指示を得て最寄の三条保健所へ通報した。(以上赤塚氏の支部報への投稿と聞き取り)

2. 三条保健所の聞き取りにより判明した現場の状況と処置

三条保健所は管轄の加茂警察署と加茂市役所に通報し、担当者の派遣を要請した。加茂警察署からは刑事生活安全課の本望係長と山田鑑識課員が駆けつけ、加茂市役所からは環境課鳥獣担当の金子係員が道案内も兼ねて同行した。それに三条保健所環境課の百都環境保全係長と眞保技師、および発見者の赤塚氏の合計6名で現地に向かった。現場には人がいなかったが、早速警察官が現場検証に入ると共に、保健所職員は集落の住民から聞き取

りを行った。調査の結果、次のことが分かった。

(1)架設されていたカスミ網は長さ12mもの4枚で、網目は36メッシュと推定された。

(2)捕獲されたカワセミは合計16羽で、すべて死んでおり、以前にかかったものは放置していたものらしく、ミイラ化しているのもあった。

(3)池の所有者と養魚業者は同一人で加茂市内に居住し、養魚池の管理はその使用人が行っていた。

発見者の赤塚氏はここで警察官より発見状況を聴取された後、現場を去った。そこで警察および保健所双方の担当者で、この件はカスミ網を架設した目的が池の魚の捕食を防ぐためのもので、特に捕獲した鳥の販売を目的としたものでないの、直ちに法を適用することはどうか、目的からして行政指導が適当ではないかと判断し、さしあたり三条保健所に調査を依頼して警察官は引き上げた。処置については特に指示はなかったが、設置者が保健所の行政指導に従わなかった場合、警察が刑事事件として取り扱うことを確認した。

同保健所では、この日のうちに養魚業者(池の所有者)とその管理人(使用人)に会って、直ちにカスミ網を撤去させると共に、関係者に詳しく事情を聴取した結果、さらに次のことが判明した。

(4)カスミ網はニシキゴイの稚魚が、カワセミに捕食されるので、池の管理人が架設した。

(5)カスミ網は、養魚業者が斡旋者を通して釣具店から購入し、管理人に渡した。

(6)その釣具店にはカスミ網のストック品が多くあり、「防鳥網」と称して販売していた。また、果樹園関係者にも販売していたようである(釣具店からの聞き取りによる)。

(7)カスミ網は7月中旬頃から架設しており、カワセミをはずさなかった理由は、はずすと網が切れることを心配したためであるという。

3. 違反者に対する処置

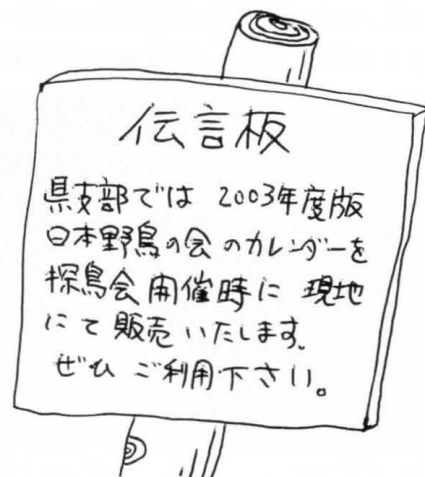
三条保健所ではこの件に関して次の処置を行った。処置については県の環境企画課と加

茂警察署に事前に知らせておいた。

(1)カスミ網は使用者の持っている分は、焼却処分にするために、次のゴミ回収時に出すことを指示し、また販売した釣具店のカスミ網は店頭から撤去し、仕入れた所に返品させることを指示した。(販売店に対するこの処置は、カスミ網の販売は原則禁じられているが、法第12条の許可を有するものには販売することが可能のため、販売目的の所持まで禁止できないので、販売店にカスミ網を処分するといった指示は行わなかった)その結果を保健所作製様式の報告書に記入して8月24日付で提出させた。保健所では燃えるゴミとして出したことやその焼却、および販売店(釣具店)のカスミ網返品などの確認はしなかった。後日販売店に立ち入って店頭から撤去したことを確認している。

(2)カスミ網を購入した養魚業者(池の所有者)、その売買の斡旋者、販売した釣具店、使用した池の管理人(養魚業者の使用人)の4者に対し、「この度はまことに申し訳ないことをした、今後このようなことは起こさない」旨の始末書を保健所長宛に提出させた。

(3)前記報告書および始末書は9月10日までに揃ったので、これまでの経過と共に県の環境企画課長へ9月18日付で報告した。加茂警察署へはその写しを送ったが、特に指摘されることもなかった。三条保健所ではその後数回現地を見回ったが、カスミ網が使用されていないことを確かめた。



支部取組みの経過

保 護 部

当支部報前号（No.53）に載せられた「カワセミ大量に殺される」は大きな反響があり、支部としては、5月11日に主だった役員の緊急会合を持って、この問題への対応を協議しました。その結果、①状況を詳しく把握するために、処理に当たった三条保健所に出向いて調査する。状況によっては関わった加茂警察署へも回って聞きただす ②それらの結果をもとに関係機関に申込書または要望書を提出する ③支部としても今後このようなことのないよう対策を検討するが、その中味としては、養魚場・釣具店・小鳥店などへカスミ網の飼養・販売・所持など違法性の啓蒙、また会員にも保護意識を高揚する啓蒙、などを話し合いました。

これを踏まえて5月16日、大島支部長と山本副支部長で三条健康福祉事務所環境センター（旧保健所）環境課へ行き、昨年この処置に当たった担当者に詳しく状況を聞きました。これに基づいて、この件に関する経過報告書（次項）を作成し、また新潟県加茂警察署長宛と新潟県県民生活環境部環境企画課長宛の要望書を作成し、大島支部長名で発送しました。（経過報告書と要望書は山本・千葉両副支部長で作成）

加茂警察署長宛の要望書の骨子は、明らかに違法なカスミ網の使用と販売に対し、「行政指導」とどめたことは疑念が残る。特に果樹園関係者にも販売されていたことは憤りを感じるところで、もっと厳正な法の適用が必要だったと考えられる。今後このような行政指導に終わらないよう、また今後の再発防止のために具体的な次の3点を要望しました。

1. 昨年の販売店をはじめ、養魚業者・関係販売店に対する一層の監視と取締りを望みます。
2. 支部としても今後養魚業者や防鳥網販売

店などへ啓蒙のため、チラシ等の配布を検討するので、理解と協力を望みます。

3. 会員がカスミ網の使用を発見した場合、直ちに通報するので迅速な対応を望みます。

県の環境企画課長宛の要望書も大体同様ですが、再発防止の具体的な要望の第1項を、昨年策定された第9次鳥獣保護事業計画書に鑑み、「カスミ網使用重点取締り」と「野鳥、カスミ網販売の情報収集」を徹底するよう、一層実効ある監視と取締りを所管組織へ指導願いたい、としました。

これら要望書に対し、加茂警察署からは支部事務局の方へ、要望書を受け取り了解した、趣旨を体して今後対応してゆきたい旨の電話がありました。なお、当支部が要望書を出した後に、全国野鳥密猟対策連絡会（略称「密対連」、事務局・京都支部内）では加茂警察署と新潟県県警本部に質問と意見書を送ったところ、県警本部の刑事生活安全課長から電話があり、「昨年の件についてはいろいろと不手際があり、お詫びいたします。野鳥等については署員の知識も浅く、今後の環境犯罪の取組みを進める上においては、野鳥の会他関係機関と連携を保ちながら進めていきたいので今後とも宜しくご協力を頂きたい。」との回答だったそうです。

これから支部として前記啓蒙のためのチラシを作成して、会員の皆様に配っていただくような取組みもしますので、その際にご協力をお願いします。また、カスミ網使用や販売を発見したら速やかに110番で警察へ、また最寄りの県の環境センターにも連絡して下さい。その後なるべく早い時期に支部事務局か保護部員にも一報下さい。（担当：山本 明）



鳥島周遊 アホウドリ・ウォッチングに参加して

新潟市 南 雲 照 三

私が鳥島に関心をもつようになったのは、新さくら丸(19.811t)で小笠原クルーズに参加した1999年以来である。この時小笠原の母島にいたメグロを中心に小笠原のことばかりしらべていたが、思いがけなく鳥島の近くに船が近寄りしかもぐるっと一周してくれたのである。お陰で双眼鏡で鳥島の様子をよく観察することが出来た。気象観測所跡はすぐ判った。また、急斜面の一部で補修作業にあたっている人の姿も見られた。東京から600kmも離れた南の孤島で作業をしている人がいるということは驚きであった。そしてその作業をしている所がアホウドリの繁殖地であることはすぐに理解できた。しかし、6月であったためアホウドリの姿はなかった。

昨年、船会社からのパンフレットに「鳥島周遊アホウドリ・ウォッチングクルーズ」の記事を見つけ、早速参加の申込をした。出港は2002年3月8日午後7時横浜港の大桟橋から、船名はふじ丸(23.340t)である。すでに日は

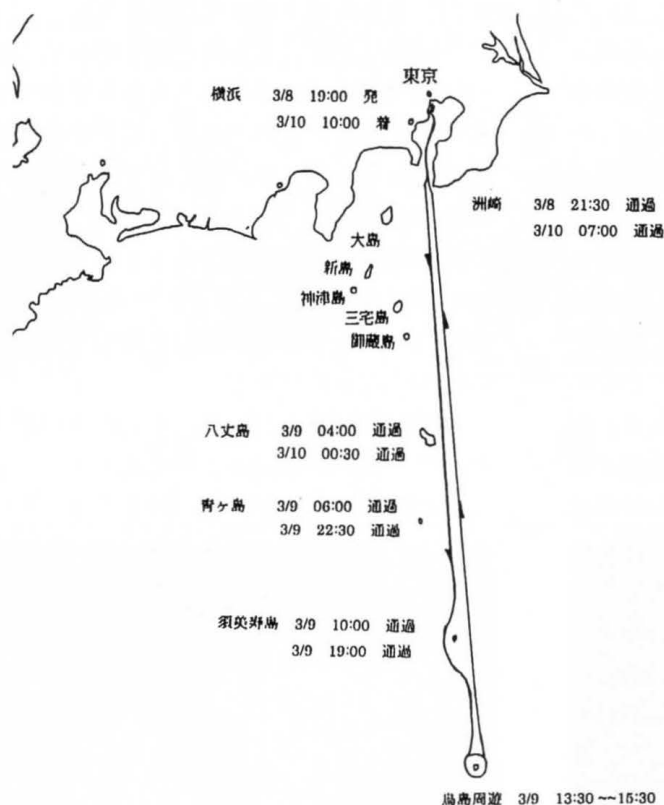
とっぴりと暮れ港の夜景がすばらしかったが、伊豆諸島付近の海鳥の観察が出来ないのが残念だった。

翌朝6時過ぎデッキに出て見ると島が見えていた。青ヶ島である。波が少しあるようだが大した事はない。朝日が雲間から差し込み空が茜色に染まってきた。しかし全く鳥の姿は見られない。鳥の姿を求めてデッキをあちこち移動してみたが駄目であった。船首の方は風が強く、とても長くは我慢できない。

このクルーズでは山階鳥類研究所の佐藤文男研究員による講演が企画されていたが、アホウドリ研究家として有名な長谷川博氏のお話が9時よりあるとのことでそちらの方へまず出席した。長谷川氏の乗船は公表されていなかったが、約100名位のチームの講師として参加されているようであった。このチームの人々は長谷川氏と顔見知りの方が中心のようでお互い親しく話しあっていた。長谷川氏のご自身が撮影されたアホウドリの素晴らしい写真



燕崎のアホウドリコロニー



アホウドリ・ウオッチングクルーズ航路図

を示しながら鳥島におけるアホウドリの現状を紹介された。その中で、雛が吐き出したものの中にプラスチックの破片や釣針などが入っているお話はショックであった。

佐藤氏は鳥島の新しい繁殖地・初寝崎に設置された無人監視カメラの映像で初寝崎でのアホウドリの様子を紹介しながら、アホウドリの生態や保護の必要性を説明された。船上のためかカメラの映像の調子が今一つはつきりしなかったが、1羽のアホウドリが動いている様子が映し出されていた。

お昼近く鳥島の島影が前方に見え始めたが、その頃になるとデッキの船首側から左舷側にかけてフィールドスコープや望遠レンズをつけたカメラがびっしりとならび始めた。午後1時40分を過ぎた頃船はゆっくりと鳥島に北側から接近、船首を右に少し回転させながら西側の初寝崎に近づいていった。切り立った崖が眼前に迫ってくる。その右側に若草色の

なだらかなスロープを描く草地が見える。その先に白い気象観測所跡の建物が見える。初寝崎である。佐藤文男氏の解説が始まる。草地に点々と白い点が見られるがそれがデコイであると説明があった。それぞれつがいに2個体向き合せてセットされている。その中に本物が2羽いるとのことだったが、残念ながら確認出来なかった。関係者の大変な努力にも拘わらず初寝崎で繁殖しているのはまだこの1ペアのみである。このペアが1996年に最初の雛を育てて以来毎年ここで繁殖するようになり、2001年1月に5羽目の雛が順調に育っているとサントリーのホームページに掲載されている。

初寝崎に立ち寄る若鳥の数

も増加しているとのことだから、何とかこの新しい繁殖地の定着への努力が成功するよう祈りたい。

初寝崎を通り過ぎるころ、1羽のアホウドリが姿を現し船の左舷にそって滑るように飛んできた。いっせいに歓声があがった。するとひらりと向きを変え今度は逆方向に翼の裏側を見せながら波にすれすれに飛んで行く。拍手が沸きあがる。はじめてアホウドリを目にした感激の一瞬である。やがて2羽となりクロアシアホウドリも加わった。カメラのシャッターを切る音がいっせいに鳴り響く。

古い繁殖地の燕崎に近づくにつれてアホウドリの数が増してくる。興奮も少し落ち着いてきたようだ。

燕崎の繁殖地は中央に土砂が流れたような跡があり、コロニーも右と左に2分されている。右側の東地区コロニーは草地も広いようにみえたが、個体数の多いのは土砂の流入被

害が多いと言われる左側の西地区のように思われた。それにこの繁殖地の傾斜度は想像以上に急斜面に見える。よくこんな場所を繁殖地に選んだのも驚くとともに、この厳しい地形に入って調査や工事をされている関係者の方々のご努力に頭が下がる思いだ。

燕崎を少し過ぎた海上には15~20羽のアホウドリの群がいくつか浮遊していた。この海上の群をラフト(raft)と呼ぶそうだが、船が近づいても逃げようともせずゆうゆうとしている。双眼鏡で充分観察可能の距離である。船がいよいよ近づくると一斉に飛び立ち壮観である。しかも飛び立っても遠くへ行くわけではない。ぐるっと回ってきてほんの少し遠くへ着水する。よほどこの海域がお気に入りなのだろう。まだ首や背中にかけて黒い若鳥が多いが、真っ白くなった成鳥も少数だが混じっている。嘴のピンク色と頭から後頸にかけてのうすい黄色もはっきり見る事が出来た。海上の群に別れて間もなく再び初寝崎に戻ってきた。約1時間かけて一周してきたのだ。船はゆっくりと2周目に入った。前回より近づいているためか、初寝崎にクロアシアホウドリのコロニーがあることが判った。デコイの並んでいる所より海岸近くの草地にクロアシアホウドリの姿が点々と散らばっている。

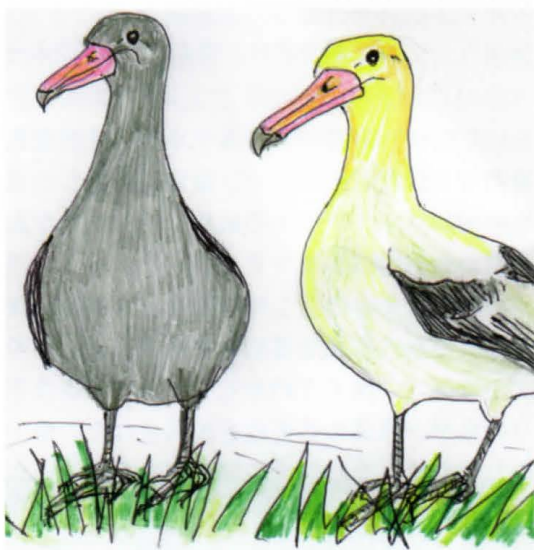
クロアシアホウドリは腹部も含め全体が黒く、アホウドリは背面に独特の白い斑紋があり明瞭に区別出来るのだが、アホウドリの若鳥は若いものほど黒い部分が多くなり、ごく若いほとんど黒一色に近い個体はクロアシアホウドリとの見分けがなかなか難しかった。背面に白斑が出ていれば迷う事はないのだが、クロアシと思っていたらお腹に白味がありアホウドリと判った場合などがあった。嘴の色

をしっかりと確認すべきだと感じた。

2回目は1回目より島に近く寄ってくれた(最接近距離約740m)こともありアホウドリを間近に観察できたのだが、ビデオの調子が悪くなりそちらに気が取られてしまったのは残念であった。

約2時間の鳥島周遊はあっというまに終わってしまった。天候にも恵まれた幸運の2時間であった。午後3時30分船首をゆっくり北に向け鳥島に別れを告げた。

今年の8月11~12日、鳥島の火山活動が活発となり上空200~300mまで噴煙をあげているとの報道があったが、その後どうなったであろうか。いまはアホウドリのいない時期だが、まもなく10月には戻ってくる。それまでに活動がおさまってくれることを祈って止まない。



発行 2002年10月1日 No.54

発行人 大島 基 編集者 小林 成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002